

## 『からし種』と『パン種』のたとえ

2015年09月16日

ルカによる福音書13章18節～21節。そこで、イエスは言われた。「神の国は何に似ているか。何にたとえようか。それは、からし種に似ている。人がこれを取って庭に蒔くと、成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る。」また言われた。「神の国を何にたとえようか。パン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」

主イエスは「神の国」の譬えを語られた。聖書が告げる「神の国」は死後の世界や抽象的な概念ではない。イスラエル人は極めて現実的な考えをする民族である。「神の国」とは神の意思が目の前で生きて働いている現実である。自分の生は神の祝福と恵みの中にあると信じ、その祝福と恵みは全ての人々にも及んでいるので、互いに受け入れ喜び合って生きるという現実である。命が守られ、平和が実現している社会と断言していいだろう。

主イエスは、その「神の国」を二つのものに例えている。一つは「からし種」に似ていると言う。からし種は本当に小さな種である。ごま粒の10分の1くらいの大きさであろうか。これを庭に蒔くと、ラッパのような形のきれいな黄色い花をつけ、幹は細いが、3～5メートルくらいに伸びる。伸びた枝に空の鳥が巣を作れるほどである。

もう一つは「パン種」に似ていると言う。パン種はパンを膨らますイースト菌である。粉に少量のパン種を入れ、こねてパンを焼く。こねた一部をとっておいて、翌朝、粉に混ぜて、パンを焼く。ヨーグルトを継続的に発酵させるのと同じ方法である。パン種は偽善などの悪が膨らむ例に使われることが多いが、ここでは「神の国」の膨張という良い例として用いられている。主イエスは「神の国」は、最初は小さいが、大きく成長し、膨らむ例えとして「からし種」と「パン種」に似ていると語っている。

ローマ帝国時代、イスラエルは世界の片隅であった。主イエスのガリラヤでの「神の国」の宣教、エルサレムでの十字架刑などを知っていたのはほんの少数であった。ところが、主イエスの出来事・福音を信じる人は、21世紀の今日、23億人にも及んでいる。驚くべき膨張である、福音の真実が可能にしたと言えよう。しかし、キリスト教の歴史において、ユダヤ人への迫害、中世のローマ・カトリックの墮落、近現代における教会の横暴など、福音とはほど遠い蛮行は数限りない。

私の神学的目覚めは、キリストの主権告白に基づく、ナチズムと闘ったドイツ教会闘争であった。国家と教会の狭間で、キリスト告白から導き出された「バルメン宣言」は人間の尊厳をリアルに捉えていた。韓国の軍政時代、民主化を目指した「民衆神学」の闘いに心が震えた。南米で起こった「解放の神学」は、貧しくさせられた人々の信仰基礎共同体を形成する営みに初代教会に倣う息吹を感じた。また、差別された黒人たちの生き生きした神学、更に、女性たちの解放を求めた「フェミニズム神学」等々、聖書の読み方を深く教えられた。主イエスの福音は高みからではなく、低みから見る時、真実が捉えられる。かつての文化的優位性を誇った宣教はもはやあり得ない。主イエスが立ち続けた低さに連動する宣教である。小さなからし種は大木になり、パン種は大きく膨らんだが、これからの宣教は、主イエスが「罪人（社会的に差別、抑圧を受けて弱くさせられた者）を招くためである」と言われた原点に回帰することによってなされる。福音は与えられた全ての命の「全肯定」であるからである。